南蛮人の言語生活

石　綿　敏　雄

1. 概　略

この研究の目的はいくつかある。1）社会言語学に関連した言語生活の記述を試みること，2）言語生活と言語の構造の関連を考えてみること，3）日本外来語の研究の一部分とすること，などである。このような目的で，当時までに南蛮人がどのような言語生活をしながら日本までたどりついたか，日本に来て日本人とどのような言語交渉をもったかなどを考えてみたいのであるが，問題をこのように分けたのは，南蛮人が日本に来て日本人とどのようにして言語伝達をかわしたかを考える場合，それ以前にどのようにして異民族と接して来たかが重要である（なぜなら，南蛮人はそれまでにかれらが体得したやり方を日本人に対しても用いたと考えられる）からである。そして日本人との言語交渉の部分は，すでに拙文「日本人と南蛮人の言語交渉」（『国学院雑誌』72巻11号）で取り扱っている。それゆえ，ここでは，日本に到達する以前の「南蛮人の言語生活」を取りあげてみたのである。なお，この論文の大綱はかつて日本ロマンス語学会研究発表会において発表した。

本稿では全体をⅠ原地人とのコミュニケーション（2.で扱う）とⅡ南蛮船内部のことば（5.で扱う）に分けて扱い，Ⅰのなかで，その通信方法として，通訳，通訳養成（2.ⅰ），身振り手振り（2.ⅱ）を考え，次にそのようなコミュニケーションを用いることによって南蛮人および原地人が外国語について関心をいだきあるいはこれを習得しその結果言語体系に影響が及ぶことがあること（3，4）について述べる。なお3，4で述べることについては従来の研究が多くあり，かつこれについては別にまとめて述べたいので，今回は二，三の例を挙げるにとどめる。

調べた文献の範囲は「日本人と南蛮人の言語交渉」と同じである。研究テーマの性質上翻訳を利用してもよいと考えたので，翻訳のあるものについては，これを用いた。（主として大航海時代叢書）

2. 南蛮人と海外土着人との言語交渉

15世紀，16世紀のいわゆる大航海時代にあって，海外に進出し，未知の土地を発見し，そこに住む人々を発見したスペイン人，ポルトガル人たちが，言語行動の上でまず行ったことは，その土地に関する情報を得ることであった。その土地がどんなところで，その付近がどうなっているのか，どんな人が住んでいるのかを知るのは必要であり，したがってそれを知りたがっていたふしがみられる。（たとえば，メンデス・ピント〝Peregrinação〟44章）。そしてそれが幸いにしてポルトガル語を話す人から得られることもないではなかった（メンデス・ピント同前91章）。しかしそれはむしろまれなケースで，多くの場合未知の言語を話す人から情報を得なければならなかった。このためには，次のような方法をとることになった。

ⅰ　両言語に通じている人（原地人が主）をさがして通訳として使用する。

ⅱ　身振り手振りなどでなんとか意志を通じあうことからはじめる。

これは現在でも考えられる方法であるが，文献を通じてみるに当時でもそうであったらしい。

i）通訳の使用

イベリア半島における歴史的な事情から，イベリア半島以外の言語あるいは文字がそこで用いられることがしばしばあったろうし，その習慣があとまで残ってもいたであろう。したがって，この方法は，特にアフリカの西海岸を南下したポルトガルの探検家たちがしばしば用いた方法であった。アメリカを発見したスペイン人も，その奥地を探検するにあたって，やはり採用している。

ポルトガル人たちは，アフリカの西海岸に沿って南へ南へと進んで行った。新しい土地へ到達すると，まずその土地の人をいけどりにし，強引につれさるということをしばしば行っている。これを奴隷として本国に連れ帰り，ポルトガル語を教えて通訳として養成し再び探検の地へと連れて行って通訳として使うということまでした。このような方針はかのドン・エンリーケが命じて行なわしめたのでもあった。「その小屋に接近するまで隠れながら進んで行くと一人の少年がすっ裸で手に投槍を持って小屋から出てくるのが見えた。その少年はそのまま捕えられた。……後に殿下はこの少年に読み書きやそのほかキリスト教徒が当然心得ていなければならないことを全部教えこむことを命ぜられた」（アズララ「ギネー発見征服誌」６０章）。「われわれはポルトガル国から連れてきた黒人の通訳奴隷を何名かずつカラヴェラ船に乗せている。いずれもこの地を最初に発見したポルトガル国の先駆者たちがセネガの首長たちから買いとった奴隷たちを養成したものである」（カダモスト「航海の記録」）。「私は連れてきた黒人通訳に命じて，馬やその他の物資をいろいろ積んで来たものだが，誰か私と商いをしないかと触れまわらせた。」（同前）。通訳の使用は時として二重になることもあった。メキシコのアステカ王国を征服したコルテスは，タバスコの戦いで，土人から送られた２０人の女奴隷の一人マリンチェを通訳として使用した。アステカ王国の使者のことばをマリンチェがマヤ語に訳し，マヤ語に通じたスペイン人アギラールがそれをスペイン語に訳すというようなことを行っている。

ii）身振り手振り

もう一つの方法は身振り，手振りでなんとか意志を通じあうことであった。これは土着人との最初の出合いの機会にはほとんど常に用いられた。「身振り手振りで彼らと話し合いながら……」（ドン・ヴァスコ・ダ・ガマが１４９７年喜望峰経由にておこなったインド発見航海記），「グアカマリー（インディオの国王）は手真似やその他出来る限りの方法で彼がこのように傷ついて寝ている上は，提督がそちらから会いに来てくれるように告げてほしいと述べました」（チャンカ博士がセビリヤ市へ送った書簡）。ことばがわからなくても，さまざまな情況から推察がつくことも多かったろう。「船の甲板の下に閉じこめられたモウロ人たちの悲歎は倍加した。なぜならかれらは言葉こそわからなかったが，キリスト教徒たちのその時の声の調子は自分たちの願っていることとは反対の成行きを証明していたからである」（アズララ前掲５４章）。

コミュニケーションは常に必ず成功するとは限らなかった。長い間のコミュニケーションがあっても，誤解が続いていることもあった。「現在も私は彼らを連れておりますが，彼らは私ともうずいぶん話合っているにもかかわらず，まだ私が天からきたものと思いつづけております」（コロンブス「計理官ルイス　デ・サンタンヘルへの書簡）。そうして結局よくわからないということもしばしばあったと推測される。「これらの地方のあるものについては，ことばがわからないために，多くを知ることができませんでした」（コロンブス「第四回の航海の記録」）。

以上は話しことばによるものであるが，書きことばによるコミュニケーションも行なわれた。これはどちらかといえば交渉が進んだ段階で行われるものであり，翻訳も行われた。《E depois que lhe deu a carta (a qual foi logo treslada, da lingoa malaia em que vinha escrita, em Português)》（メンデス・ピント前掲13章）。ティドレの王がマニラに送った書簡はポルトガル語で書かれ（モルガ「フィリピン諸島誌」），中国南部の都市の総巡察使たちから比島総督が受けとった手紙はスペイン語に翻訳されていた（同前）。この時期にはすでにヨーロッパ語の優位性がある程度確立していたのかもしれない。

手紙ばかりでなくその他の書類もあったと考えられる。たとえばポルトガル人は貿易許可証のようなものも入手している（メンデス・ピント前掲52章）。

3. 南蛮人の外国語への関心

多くの土着人に接すると，おのずからそれに関心をもつことになる。「われわれは連日新しい種族たちの訪問を受け，様々な土語を話す連中と接触した」（カダモスト「第二次航海の記録」）。またキリスト教を広めるためにはそれが必要であった。「（インディオが）神を表わす固有の名称を持っていなかったことは，私にはなんとも不思議に思われる。……だからインディオに説教したり書いてやったりする人たちはわれわれエスパニヤ語のディオスという言葉を，多様極まりないインディオ諸語の特性に応じて発音発声を変えながら使っているのである」（アコスタ「新大陸自然文化史，下」）。マゼランの探検の完成が言語が通じることで証された話はよく知られている（ピガフェッタ「最初の世界一周航海の報告書)。

アメリカの土人の象形文字，中国の漢字など，彼らにとっては全く珍しいものにうつったにちがいない。その種の記録は数多く残っている。（アコスタ「新大陸……，下」，ゴンサーレス・デ・メンドサ「シナ大王国誌」IおよびII，など）。ピガフエッタが書きとめたブラジル原住民のことばのなかに，たとえばmaizなどがみられる（前掲書）。このようなことばは，ものとともにヨーロッパ語のなかにとり入れられたのであった。

南蛮人の外国語への関心は，キリスト教布教の目的からヨーロッパ人の外国語習得へと発展し，その記述も組織化する。そしてそれは言語学の発達をうながすのであるが，その辺の事情は言語学史に詳細に記述されているので，ここでは述べない。

4. 土着人のヨーロッパ語学習とヨーロッパ語からの影響

通訳奴隷がスペイン語，ポルトガル語を学習させられたことについては，はじめに述べたが，ここではそれ以外の人たちのスペイン語・ポルトガル語の習得あるいは関心をもったことについて述べ，あわせて東洋の諸言語へのイベリア両言語の影響について述べてみる。

東洋に向かったポルトガル人たちは，後になってはポルトガル語を話す土着人たちがふえてきたのでそれを当てにしていたが，当初はとても当てにできないことであった。何か特別の事情でポルトガル語を話す人がいると喜んだ。その一つとしてメンデス・ピントの例をはじめに紹介したが，なお一つを挙げてみる。「一人のモーロ人は彼につきそってやってきたが，……そのことばを聞いてわれわれはすっかりびっくり仰天した。ポルトガルからこれほど遠くはなれた地にわれらのことばを理解する男がいようとはとても信じられなかった」（ドン・ヴァスコ・ダ・ガマのインド航海記）。ヨーロッパとの交易が行われるようになると，その言語を習得した人が出てくるようになる。「するとこのチナ人はポルトガル語にく

わしいもう一人の男を連れてきた。もう一人の男というのは，本人も妻も息子たちもキリスト教徒であり，（生まれはチナ人ながら）一家そろってマカオに住んだことがあるということだった」（ゴンサレス・デ・メンドサ「シナ大王国誌」）。キリスト教の布教もヨーロッパ語教育を組織的に進めることになった。「修道士たちは自分たちの改宗村において原住民の宗教問題に責任を持つと共に，彼らの教育，啓蒙の仕事にも従事し，学校を持って子供たちにエスパニャ語による読み書きを教えている。さらにまた教会での作法，単旋聖歌，オルガン伴奏による聖歌，吹奏楽器の奏法，踊り方歌い方……を教え既に多くの成果をあげている。特にマニラの周辺がすばらしく……彼らはまた聖書劇をエスパニャ語や彼らの言語でなかなか面白く演じている」（モルガ「フィリピン諸島誌」）。キリスト教に改宗すれば，洗礼名もつけた。「提督は王の手をとって壇の上につれてゆき，洗礼を受けさせた。そして主君であるエスパーニャ皇帝にちなんでズブ王をドン・カルロと名づけた。……それからほかの人たちにもそれぞれ洗礼名をつけてやった」（最初の世界一周航海の報告書）。

ヨーロッパ人との接触あるいはヨーロッパ語の学習により，ヨーロッパ語の語彙の借用などが行われ，その影響も現われてくる。「以上述べた動物は間違なくエスパニャから持ってこられたものであり，発見時代には新大陸にはなかったものである。……インディオ語のなかにはそれらの動物をあらわす固有の語がなく，訛ってではあるがエスパニャ語の単語が使われていることもいい証拠だろう。つまりあるものを知らないので，その由来した国の言葉を借用したのである」（アコスタ「新大陸自然文化史，上」）。マゼランがモルッカ島のモロたちの単語集として書きとめた単語のなかに，紙の意でcartasがみられるが，これは１５１２にはじめてポルトガル人がここに来てからわずか１０年のことであって，その間にすでにポルトガル語のインドネシアの言語への影響がみとめられているわけである。このことばは現代のインドネシア語，マレー語にも残存している。

ポルトガル語，スペイン語がアメリカ，アフリカ，アジアの言語に大きな影響を与えたことは，各言語の記述的研究からも明らかにされてきている。その傾向は上述のような事実からみて，その当初の時期においてすでにかなり明らかに存在していたのではないかと考えられる。

4. 南蛮人の間のコミュニケーション

南蛮船に乗船していた人たちはどのようなことばを話していたのであろうか。スペイン系の船ではスペイン語が，ポルトガル系の船ではポルトガル語が話されていたであろうことは直ちに想像されるところである。たとえば世界一周の初めての航海を果したマゼランの一行のはじめの構成は，全部で２７０～２８０人で，そのうち少なくとも３７人はポルトガル人，３０人イタリア人，１９人フランス人，そのほかフランドル，ドイツ，シシリア，イギリス人，黒人がはいっていたが大部分はスペイン人であったらしいという。そうであれば，話されることばはスペイン語が主であったに相違ない。ピガフェッタのイタリア語の報告文のなかに，「一人の敵が大きな広刃刀（terciado）で提督の左脚に切りつけた」とあり，このような場所になまのスペイン語が使われているのは，それを証するものと考えてよかろう。「旗艦の船尾にファロルという松明を常時つるしておく」（同前）という場合にもスペイン語farol をそのまま使用している。

ポルトガル船のなかではポルトガル語が話されていたろうと考えられる。諸記録にポルトガル語を話す通訳のことが出てくることからもそれが証せられよう。

このように一応の主流派の言語が想定されても，全生活において例外なしにそれを使うのが困難だったことは，乗員の構成が混質的なことから，また容易に想像されるところである。ことに南欧の言語は互いによく似ているところから，これらの諸言語がまじえて用いられたことも多かったであろうし，それでかなりよくコミュニケーションが行われることは，今日のわれわれが実際に目撃してもいるところである。南蛮船内の言語は，多くの場合多数派があったとしても，やはりかなり混質的であったに相違ない。そうして自分の言語でない言語を使用すれば，話しことばなどでは，時にはかなり正しくない表現も聞かれたであろう。セルバンテスの「模範小説集」のなかで用いられたポルトガル語に誤りがあることも，それを証すると考えられる。

南蛮船のなかで話されたスペイン，ポルトガルの言語の内部（方言など）はどんなことばであったか，これは推測しにくいが，それも混質的なものであったことにはまちがいないであろう。ただ，たとえばスペイン語についていえば，現在の南米のスペイン語の状態からみて，どちらかといえば南方のスペイン語，スペイン出発の港であったセビーリャ付近の言語の影響が強かったことは既に指摘されていることであり，またアマド・アロンソによれば，各地の方言を話す人が集まるところではむしろ共通語を話す傾向もあったという。これはスペイン語の伝播を考える上で，重要であると考えられる。

南蛮船にはseñor(senhor) が乗り，兵士が乗り，船員が乗り，奴隷が乗っていた。「びろうど」や「ちゃるめら」や「びすこうと」も積みこんであった。これを証する記録は，たとえば日本語のなかに与えた外来語の痕跡とぴたりと一致するものである。交易や布教のやり方も，日本にくるまでに行ってきたものと，日本に来てからのものとは同様のものであった。それゆえに，このような南蛮人の言語生活を考えてみ，南蛮船のなかの言語を考えてみることは，それ自身一つの目的をもつと同時に，日本語との交渉を考える上でも必要なことであると考えられる（本稿では多くの類例を挙げるべきであったが，都合で省略した）

（茨城大学教授）